

大学生の「ケータイ・コミュニケーション」にみられる男女差

A Preliminary Survey of the Gender Difference in Cellular Phone Communication for University Students

石川 勝博 ISHIKAWA, Masahiro

● 常磐大学
Tokiwa University



「ケータイ・コミュニケーション」, 男女差, 大学生

Cellular phone communication, gender difference, university students

ABSTRACT

本研究の目的は、ケータイ・コミュニケーションの逆機能的側面（受動的対人関係、束縛、情報不安、逃避、言語表現力の低下、煩わしさ）において男女差が見られるのかを、探索的に実態を明らかにすることである。この研究課題の検証のため、2004年1月と2月に質問紙調査を実施した。対象は、茨城県内の大学生517名であり、回答に不備がある者を除く、501名が分析対象となった。男女比較をするために、データをt検定によって分析した。その結果、ケータイ・コミュニケーションにおいて、女子学生は、男子学生よりも、「束縛」と「逃避」強く感じていることが明らかになった。今後は、こうした男女差をもたらす要因を探っていくことが必要であろう。

The purpose of this study is to clarify the relationship between dysfunctional aspects of cellular phone communication; (passive interpersonal relationships, restraints, anxiety towards information, escape, lower abilities in verbal expression, and annoyance) and gender difference. A survey was conducted by a questionnaire method during January and February of 2004. The subjects were 517 Japanese university students from Ibaraki prefecture. The total of valid responses was 501. For analyzing the data, the Student's t test was utilized. The result of this study shows that female feel more restraints and escape in cellular phone communication. It was necessary that more attention should be paid to factors in gender difference.

1. 研究の背景と目的

近年の携帯電話は多機能化が進み、単なる通話機器を超えた情報通信技術 (Information and Communication Technology: ICT) となっている。こうした点を踏まえて、以下本稿では、多機能化した携帯電話を「ケータイ」と表記する。ただし、文献からの引用の場合には、適宜その表記に従い、「携帯電話」などの語を用いることにする。

現在、ケータイは情報通信技術の1つとなっている。しかし、一般的には、コンピュータが、情報通信技術を代表するものであろう。「技術大国ニッポン」に対しては、ハイテク技術を駆使するとのイメージがあるが、日本人学生のコンピュータに対する不安意識 (コンピュータ不安) は、諸外国の学生と比較して高いという (Weil と Rosen, 1995; 海後, 2001)。

とすれば、多機能化したケータイに対しては、不安はないのかという疑問が生じる。現在のところは、ケータイというメディアに対する不安は、先行研究ではほとんど扱われておらず (石川, 2005)、ケータイ・コミュニケーションへの不安 (マイナスの側面) の問題として取り上げられている (石川, 2004)。

「コンピュータ不安」に関する一連の研究 (平田, 1991 など) では、興味深い発見がなされている。それは、コンピュータに対する態度に男女差が見られることである。女性は男性よりもネガティブな態度をもつとされ (Chen, 1986; 平田と久野, 1999; Dryburgh, 2000)、コンピュータ不安の度合いが高いことが示されている (平田と久野, 2003)。

ケータイについて男女差は、見られるのであろうか。先に述べたように、ケータイというメディアに対する不安研究例はほとんどないので、以下では、ケータイ・コミュニケーションに関する調査によって見いだされた男女差について述べる。

1.1. ケータイ・コミュニケーションに見られる男女差 (日本の研究)

岡田ら (2000) は、「携帯電話利用による行

動・意識に関する調査」の報告のなかで、男女差について言及している。この調査は1999年5月から6月にかけて、関東と関西あわせて4つの私立大学の学生を対象に実施された。被調査者数は関東298名、関西292名の計590名であった。性別の構成比は男子35.6%、女子63.4%である。この調査では、男女でケータイの利用率に差は見られなかったが、それぞれのケータイ・コミュニケーションの特色として以下の2点を示している。

1) 男性は「個人専用のメディア」として、女性は「安心のためのメディア」として捉えていること。男性は、携帯電話を所有することで自由に外出できるようになるという。また、家族と一緒に暮らしている場合でも自宅で利用する傾向にあるという。こうしたことから、男性にとってケータイは、「個人専用のメディア」であるとされている。

その一方、女性は、「家に連絡を入れたり、家族とコミュニケーションをとることが増えた」、「持つことで家族が安心するようになった」という質問への回答の得点が高かった。さらに、友達との連絡手段にするだけでなく、非常時や緊急時の連絡に備えて購入する傾向も見られた。女性は、他者とのつながりを保つことでの安心、すなわち「つながる安心感」を得るためのメディアとケータイを捉えている。さらに松田 (2002) の研究では、携帯電話の話し相手について、女性は家族や友人との通話が多く、男性は仕事関係の人脈との通話が多いことも示されている。

2) 女性の方が文字利用を意識している傾向があること。この調査では、文字メッセージ機能の利用者は女性が73.9%、非利用者は男性が59.3%であった。そこで、女子が文字メッセージ利用の中心であると推測している。ただし、これは1999年当時の数字であり、現在では男女それぞれの利用率は高まっていると考えられる。男女の利用率の差が縮まっている可能性もある。

次に、三上 (2004) による携帯電話研究のなかで、見られた男女差について取り上げる。ここでは、先ず、PCインターネットと携帯インターネットの利用率の比較から、男女の差が検討されている (表1)。

表1 インターネットの種類別に見た利用率の性別比較 (%) (三上 2004, p.179)

	男性	女性
インターネット利用率	53.5	47.9
PCインターネット利用率	45.5	33.5
携帯インターネット利用率	31.4	35.5

男性と女性では、インターネット全体の利用率に53.5%と47.9%と5.6%の差がみられるが、経年比較するとその差は減少傾向にあるという。インターネットの種類別にみると、PCインターネットの利用率では男性が女性を差を上回っているが、携帯インターネットでは、女性が男性を上回っている。こうしたことから、彼は「インターネット利用率の男女格差の縮小は、主に女性の携帯インターネット利用の増大に起因するものと考えられる (p. 179)」としている。女性にとって、携帯電話はコンピュータよりも利用しやすいメディアなのであろうか。

さらに、彼は、2003年11月から12月にかけて実施した「ワールドインターネットプロジェクト」の結果を示している。この調査は、層化二段無作為抽出法で抽出された全国の12歳以上の男女2200人を対象として実施された。有効回収数は1520 (69.1%) であった。この調査では、各年代において女性の方が、携帯メールの利用率が高かった。利用率に、性別による格差が見られたのである。しかしながら、10代での男女差はわずかであった (男性96%に対して、女性は100%)。先に挙げた岡田ら (2000) の結果と併せて考えると、10代から20代初めの若年層においては、「男女の利用率にほとんど差はみられない」ようである。

男性の方が女性よりも通話時間が長く、女性の方が男性よりもメールの利用時間が長いという結果も示されている (三上, 2004)。女性のメール利用時間の長さを、文字によるやりとりへの指向の強さのあらわれと捉えると、岡田ら (2000) のいう「女性の方が文字利用を意識している」ことと関連があると考えられる。

1.2. ケータイ・コミュニケーションに見られる男女差 (海外の研究)

ここでは、海外でも特に、携帯電話シェア世界一の「ノキア」で知られる「ケータイ大国」フィンランドでのケータイ研究を紹介する。スコグ (2003) やコポマー (2004) は、男女のケータイ・コミュニケーションの差異を見いだしているの、以下、概観する。

スコグ (2003) の論説では、フィンランドにおける「アナログとデジタルの学習素材：情報社会における生徒と教員 (ADL研究)」の結果が紹介されている。この調査は、フィンランドの公立学校の生徒を対象として実施された。分析対象者は、層化二段無作為抽出法によって得られた17校の9年生、2979名である。ここでは、1) 「携帯電話を選択する際の少年と少女の最重要要件」と、2) 「携帯電話の利用における最重要要件」にみられる男女差が示されている。それをまとめたのが、表2と表3である (スコグ, 2003, p.343に則って筆者が作成)。

表2

携帯電話を選択する際の少年と少女の最重要要件 (%) (スコグ, 2003)

	少年	少女
カラー	6	17
デザイン	50	55
パフォーマンス	60	46
着信音	43	50
利用しやすさ	79	79
ロゴ	34	20
ブランド	51	30

表3

携帯電話の利用における少年と少女の最重要要件 (%) (スコグ, 2003)

	少年	少女
通話	50	56
友人	62	67
電波のつながりやすさ	75	68
SMS	62	75
バッテリーのもち	21	8
ステイタス	17	17
WAP	19	11

なお、SMS (Short Messaging Service) とは、ケータイの間でやりとりするメールサービスのことである。つまり、日本でいうケータイ・メールのことである。ただし、フィンランドでは日本と違い、コンピュータとケータイのメールはそれぞれ独立しているという (溝渕, 2004)。WAP (Wireless Application Protocol) 電話とは、インターネットや電子メール機能が使えるケータイのことである (スコグ, 2003)。

表2の回答結果については、「少女はパフォーマンス仕様に興味があるのにたいして、少年は、電話の技術的仕様に興味がある (p.342)」と解釈されている。表3の回答結果については、「少女は、より携帯電話利用の社会的意味を指向し、少年は技術的機能を指向する (p.344)」と解釈されている。以上から、スコグ (2003) は、「少女の回答は、象徴的 (カラー、デザイン) な方向へ強く触れる方向にあり、少年は機能的 (技術的性能、ロゴ、ブランド) な方向によっている (p.350)」とし、これは伝統的なジェンダーの役割を反映していると捉えている。

それと共に、多くの少女が技術的仕様の重要性を強調し、少年が携帯電話利用の電波のつながりやすさによる社会的意味を強調する面もあるとする (表2, 3)。そこで、「デジタル領域を特徴づけてきたジェンダー決定論を超越しているかもしれない (p.350)」という解釈も示されている。

コボマー (2004) は、ケータイ・コミュニケーションに関する調査によって明らかになった男女差について報告している。まず、ケータイの利用に男女差はなく、「若い女性は男性同様、ケータイのとりこになっている (p.14)」とする。ここでは、具体的な数字は示されていないが、ケータイの利用率については、男女に差はないことをうかがわせるものである。ただし、「通信技術に限らず新しいモノを導入する際の判断基準として、男性は仕事等の『実用性』を重視するのに対して、女性はおしゃべりなどの『社交性』を重んじる傾向にある (p.19)」としている。

さらに、19才から22才の学生を対象とした

SMSによるテキストメッセージの利用に関するインタビュー (男性10名、女性11名) の結果を報告している。男女差がみられた回答結果についての記述をまとめると次のようになる。

- 1) 女子は男子よりもショートメッセージを室内で用いる傾向が強い (p.52)。
- 2) ショートメッセージは、女子は、情報的な内容よりもメッセージのおもしろさの面を強調する (p.56)。
- 3) 女子は、顔文字のような独特の記号をより多く使う (p.58)。
- 4) 男子は、グループ内にメッセージを送る傾向が強い (p.60)。
- 5) 女子は、「即返し」する傾向が強い (p.62)。

1.3. 小 括

ここでは、以上の先行研究の結果をまとめる。概して言えば、ケータイ利用率については、少なくとも10代から20代初めの若年層の男女に差はないようだが、そのコミュニケーションには差が見いだされている。

女性はケータイを「社会関係の構築」のためのメディアとして利用しているようである。女性は、携帯電話利用の社会的意味を指向し (スコグ, 2003)、友人や家族と常につながっているという「安心のメディア」をケータイに求めている (岡田ら, 2000)。女性は、「即返し」する傾向が強いと言う点 (コボマー, 2004) も「つながりによる安心感」を求めることのあらわれと解釈できる。仲島ら (1999) は、ケータイが成立させる常につながりあう関係を「フルタイム・インティメイト・コミュニティ」と呼んでいるが、女性はこうした関係を好む傾向にあるのだろうか。

また、女性は、メールによる (文字利用による) コミュニケーションへの指向が強いようである。女性の方がメールの利用時間が長く (三上, 2004)、文字利用を意識している傾向にある (岡田ら, 2000)。フィンランドの研究では、女性のメールには顔文字が多くみられるようである

が(コボマー, 2004), 日本でも中村(2001b)が, 絵文字は女性のメールに多くみられることを示している。ケータイ・メールで用いられる独特の記号の利用において, 両国で共通する結果であり興味深い。メールでの内容については, 女子は, 情報的な内容よりもメッセージのおもしろさの面を強調している(コボマー, 2004)。

先行研究では, ケータイ・コミュニケーションにおける男女差は, 以上のようなかたちで見いだされている。ケータイ・コミュニケーションには, プラスの側面だけでなくマイナスの側面もあると捉えるべきであるが(石川, 2004), 先行研究では, プラスの側面での男女差は見いだされているが, マイナスの側面については検討されていない。そこで, マイナスの側面についての実感に差があるのかを確かめることにした。本稿では, マイナスの側面として, ケータイ・コミュニケーションの逆機能的側面(石川, 2004)を用いることとする。

以上から, 本稿は, ケータイ・コミュニケーションのマイナスの(逆機能的)側面において, 男女差が見られるのか, 探索的にその実態を明らかにすることを目的とする。

2. 調査

2.1. 調査の目的

ケータイ・コミュニケーションの逆機能的な側面の実感度に男女差がみられるのか, 探索的にその実態を明らかにすることである。そこで, 次の研究課題(Research Question: RQ)を設定し, 質問紙法による調査を実施した。

研究課題(RQ): ケータイ・コミュニケーションの逆機能的側面の実感度に, 男女差が見られるのかを明らかにする。

2.2. 被調査者

茨城県内の大学の学生517名である。そのうち, 回答漏れがあるなどした16名を除く501名を分析対象とした。その内訳は, 表4に示すとおりで

ある。男性240名, 女性261名と, 比較的男女のバランスが取れたデータを得ることができた。

表4 分析対象者の内訳

	男	女	合計
A大学	116	121	237
B大学	124	140	264
合計	240	261	501

2.3. 調査時期と調査の方法

2004年1月中旬と2月初旬に集合調査法により実施した。授業時間内に質問紙を配布して, 一斉に回答させた。

2.4. 質問紙の内容

調査で用いた質問紙の内容は, 次に示すとおりである。

2.4.1. デモグラフィック属性

被調査者が通う大学名と性別, 学科, 学年について尋ねた。

2.4.2. 1日あたりの通話回数とメールの送受信回数

1日当たりの, おおよその通話回数とメールの送受信回数を回答させた。それぞれについて「0～4回, 5～9回, 10～14回, 15～19回, 20回以上」の選択肢から, 1つを選ばせた。

2.4.3. ケータイ・コミュニケーションの逆機能的側面(18項目)

ケータイ・コミュニケーションの逆機能的側面, すなわち受け手にとってのマイナスの側面に関する質問をした。逆機能的側面は, 受動的対人関係, 束縛, 情報不安, 逃避, 言語表現力の低下, 煩わしさの6つの側面からなる(石川, 2004)。石川(2004)の研究では36項目を用いたが, 本研究では被調査者の回答上の負担を軽減するため, 項目数を減らすことにした。そこで, 最も項目数が少なかった第6因子(3項目)に項目数を揃え, 各因子より負荷量の高い順に3項目ずつ, 計18項目を採用した(表5)。調査票での配列は, 解釈

度を超えてランダム化された。測定は、リッカート法による5段階尺度でおこなった。

表5 ケータイ・コミュニケーションの逆機能的な側面に関する質問項目

受動的対人関係
1. 人間関係が狭くなったと感じる
2. 人とのつきあいが表面的になった
3. 皆の意見に合わせるようになった
束縛
4. 返事がもらえないと、不安になる
5. 連絡が来ないと寂しい
6. いつ連絡が来るかと、気が休まらなくなった
情報不安
7. 個人情報が漏れるかと心配になる
8. 知らないうちに被害を受けないかと心配だ
9. ケータイで知った間違った情報を信じてしまった
逃避
10. 自分をコントロールできなくなった
11. 時間を無駄に過ごすようになった
12. 嫌なことがあると、ケータイに逃げてしまう
言語表現力の低下
13. 辞書を引かなくなった
14. 正しい日本語ではない表現を使うようになった
15. 漢字が書けなくなった
煩わしさ
16. 他の人のマナー違反が不快に感じた
17. 都合が悪いときに連絡がきて、面倒くさい
18. 返事するのを負担に感じた

3. 分 析

以下では、本研究の研究課題にしたがい、分析を行う

研究課題（RQ）：ケータイ・コミュニケーションの逆機能的側面の実感度に、男女差が見られるのかを明らかにする。

3. 1. 携帯電話の機能別の利用頻度

携帯電話による通話とメールの送受信の頻度に関する回答結果を、男女別にまとめたものが表6と表7である。

表6 1日あたりの携帯電話による通話回数

選択肢	男性		女性	
	度数	%	度数	%
0～4回	207	86.25%	238	91.19%
5～9回	29	12.08%	20	7.66%
10～14回	2	0.83%	2	0.77%
15～19回	1	0.42%	1	0.38%
20回以上	0	0.00%	0	0.00%
無回答	1	0.42%	0	0.00%
合計	240	100.00%	261	100.00%

表7 1日あたりの携帯電話によるメール送受信回数

選択肢	男性		女性	
	度数	%	度数	%
0～4回	57	23.75%	29	11.11%
5～9回	78	32.50%	94	36.02%
10～14回	42	17.50%	53	20.31%
15～19回	21	8.75%	24	9.20%
20回以上	42	17.50%	60	22.99%
無回答	0	0.00%	1	0.38%
合計	240	100.00%	261	100.00%

表6を見ると、男女ともに1日あたりの通話回数は、「0～4回」に集中している。男女比較をしてみると、「0～4回」の回答は、男性86.25%にたいして女性が91.19%、「5～9回」は男性12.08%、女性7.66%となっている。その他の選択肢への回答度数は、男女ともほぼ同様である。この結果からすれば、通話回数については、男性の方が若干多いと言えそうである。先の三上（2004）による「男性の方が女性よりも通話時間が長い」という結果とも合致する。

メールの送受信についてはどうであろうか。表7を見てみると、通話回数と異なり、回答にばらつきが見られる。男女比較をしてみると、「0～4回」は男性23.75%と女性より多い。「5～9回」、「10～14回」、「15～19回」、「20回以上」

の回答については、いずれにおいても女性の方が多い。よって、女性の方がメールの送受信回数が多いと解釈できる。三上（2004）は、女性の方が男性よりもメールの利用時間が長いという結果を示しているが、今回のデータはこの結果と合致するものである。

3.2. ケータイ・コミュニケーションの逆機能的な側面の実感度の男女比較

ケータイ・コミュニケーションの6つの逆機能的な側面について、その得点平均と標準偏差を表8に示す。各項目は、リッカート法による5段階尺度で測定した。6つの逆機能的側面はそれぞれ3項目で測定したので、最低点は3点、最高点は15点である。

表8 ケータイ・コミュニケーションの逆機能的側面の実感度の得点平均と標準偏差

	受動的対人関係	束縛	情報不安	逃避	言語表現力の低下	煩わしさ
得点平均	6.85	9.50	8.46	6.06	8.56	10.69
標準偏差	2.33	2.58	2.74	2.45	2.92	2.39

研究課題（RQ）を検討するために、ケータイ・コミュニケーションの逆機能的な6つの側面それぞれについて、男女の得点平均の比較を行った。その結果を表9から表14に示す。

表9 「受動的対人関係」に関する男女差のt検定結果（ウェルチ）（両側検定）

	人数	平均	標準偏差	自由度	t値
男	240	7.00	2.37	499	1.25
女	261	6.74	2.28		

n. s.

表10 「束縛」に関する男女差のt検定結果（両側検定）

	人数	平均	標準偏差	自由度	t値
男	240	9.14	2.59	499	3.03**
女	261	9.84	2.53		

**p<.01

表11 「情報不安」に関する男女差のt検定結果（両側検定）

	人数	平均	標準偏差	自由度	t値
男	240	8.38	2.90	499	1.25
女	261	8.55	2.56		

n. s.

表12 「逃避」に関する男女差のt検定結果（両側検定）

	人数	平均	標準偏差	自由度	t値
男	240	5.86	2.44	499	1.80*
女	261	6.25	2.45		

*p<.05

表13 「言語表現力の低下」に関する男女差のt検定結果（両側検定）

	人数	平均	標準偏差	自由度	t値
男	240	8.45	2.94	499	0.80
女	261	8.66	2.90		

n. s.

表14 「煩わしさ」に関する男女差のt検定結果（両側検定）

	人数	平均	標準偏差	自由度	t値
男	240	10.62	2.39	499	0.56
女	261	10.74	2.38		

n. s.

以上に示したとおり、表9の「受動的対人関係」、表11の「情報不安」、表13の「言語表現力の低下」、表14の「煩わしさ」においては、男女の差は有意ではなかった。有意な差が見られたのは、表10の「束縛」（ $t=3.03$, $p<.01$ ）、表12の「逃避」（ $t=1.80$, $p<.05$ ）であった。いずれにおいても、女性が感じるケータイ・コミュニケーションの逆機能の度合いは、男性のそれよりも高いという結果になった。なお、表9の受動的対人関係については、男性と女性の得点の分散が等質と見なせなかったため、ウェルチの法によるt検定を行った。

4. 考 察

表10と表12に示したとおり、ケータイ・コミュニケーションの逆機能的側面としての「束縛」、「逃避」の実感度に男女差が見られ、いずれも女性の方が男性よりも強く感じていた。女性の方が男性よりも不安が強いという傾向は、コンピュータ不安に関する研究結果と相通ずるところがあり興味深い。以下では、分析結果の解釈と今後の課題について述べることにする。

表10の「束縛」に関する分析結果は、女性の方が男性よりも、連絡や返事がもらえないときに感じる不安が強いことを示している。この点について、先行研究で示された、女性はケータイを「安心のメディア」と捉えていること、「社会関係の構築に用いる」ことを参考に解釈する。

安心や社会関係の構築といった側面は、ケータイ・コミュニケーションのプラスの側面、すなわち、順機能と捉えられるが、それが逆機能的に働いた場合には、「つながり合い、社会関係を保っていないと不安」ということになる。

これは、「4. 返事がもらえないと、不安になる」、「5. 連絡が来ないと寂しい」、「6. いつ連絡が来るかと、気が休まらなくなった」とった項目からなる「束縛」と対応すると考えられる。女性は「つながっている安心感」と共に、その裏返しである「束縛」もより強く感じるのではなかろうか。

次いで、表12の「逃避」について男女差が見られた理由について解釈したい。逃避を構成する項目は、「10. 自分をコントロールできなくなった」、「11. 時間を無駄にすごすようになった」、「12. 嫌なことがあると、ケータイに逃げてしまう」の3つである。今回の調査では、女性の方がこうした実感度が強いことが示された。

女性のケータイ・コミュニケーションと逃避との関連は、どのように解釈できるだろうか。その糸口となるのは、女性がメールの送受信回数が多いことであろう（表7）。

ケータイ・メールによるコミュニケーションのありようについては、先行研究において、道

具的（instrumental）というよりもコンサマトリー（consummatory）な傾向が強いことが示されている（中村，2001bなど）。コンサマトリーなコミュニケーションとは、目的を持たないコミュニケーションである。

中村（2001b）は、音声通話に比べて携帯メールに、「特に用件のないおしゃべりといったコンサマトリーな内容（おしゃべり的な内容）が多い」と報告している。「用件のないおしゃべり」が、全て逃避的コミュニケーションとは限らないが、逃避的な色合いは強いと言えるであろう。

また、辻と三上（2001）の調査でも類似した結果が導き出されている。彼らは、大学生の携帯メールによるコミュニケーションに関する調査（関西大280票，東洋大学354票）を実施した。ここでは、コミュニケーションの目的とそのために用いるコミュニケーション・メディアとの対応関係を調べている。

コミュニケーションの目的とは、1) 悩み事の相談、2) 暇つぶし・時間つぶし、3) 友だちづくり、4) 趣味・関心事の情報交換の4つである。コミュニケーション・メディアとは、1) 直接会う、2) 携帯通話、3) PCメール、4) 携帯メール、5) 手紙の5つである。この調査では、携帯メールは、「暇つぶし・時間つぶし」に、最も有効であると認識されていた。「暇つぶし・時間つぶし」は、逃避的なコミュニケーションであり、ここでも、携帯メールと逃避との関係が見て取れる。

また、コボマー（2004）も、携帯メールは、暇つぶしや逃避に有効であるとして、女子は情報的な内容よりもメッセージのおもしろさを強調していたとする。さらに、テキストメッセージによるコミュニケーションについて、以下のように述べている。

「メッセージの送信は、ひまつぶしに向いている。（中略）テキストメッセージは、そのときの環境とかかわりなく、送り手の考えを受け手に伝える。その目的は逃避である。この場合の逃避は、物理的な状況から逃れたいというよりは、まず受け手との関係を

維持したいためである (p.53)」

このように捉えると、携帯メール利用と逃避(論者によって、コンサマトリー・時間つぶし・暇つぶしという語が用いられているが)とが関連する蓋然性が指摘できる。女性には、ケータイ・メールの利用が多いために、ケータイ・コミュニケーションの逆機能的側面としての「逃避」を強く実感していると推測される。

しかしながら、今回の調査では、女性のメールの目的や内容が逃避的であるか否かを測定していないので、こうした関連づけには問題が残る。今後は、ケータイ・コミュニケーションの目的や通話やメールでのやりとりの内容といった要因を加味していく必要がある。

前述のコポマー (2004) によれば、メールによる逃避の目的に、受け手との関係を維持することがある (p.53)。今回の調査で、女性が強く実感しているのは、「逃避」と共に、「つながっている安心感」の裏返しである「束縛」であることが示されたことと関連あるのかもしれない。これも今後検討すべき問題であろう。

以上のように、今回の探索的な調査によって、ケータイ・コミュニケーションの逆機能の実感度に男女差がある可能性が示唆された。さらにその結果について、先行研究のデータとの関連から考察した。今回のデータは、無作為抽出によるものではなく、地域も限定されている点から、一般化するには問題がある。さらに調査地を広げる必要があるだろう。今後の課題としては、男女の違いをもたらす変数(例えば具体的なやりとりの内容)を精査することが挙げられる。さらには、ジェンダー論に基づく検討が必要と考えられる。

参考文献

- Cambre, M.A. & Cook, D.L. (1985). Computer anxiety: Definition, measurement, and correlates. *Journal of Educational Computing Research*, 1985, 1, pp. 37-54.
- Chen, D.T. (1986). Gender and computers: The beneficial effects of experience on attitudes. *Journal of Educational Computing Research*, 2 (3), pp. 265-282.
- Dryburgh, H. (2000). Underrepresentation of girls and women in computer science: Classification of 1990s research. *Journal of Educational Computing Research*, 23 (2), pp. 181-202.
- 布留武郎・平田賢一 (1969) 家庭のテレビジョンに対する高校生の態度. 国際基督教大学学報 I-A 教育研究, 14, pp. 157-179.
- 平田賢一 (1991) コンピュータ接触にみられるアンビバレンス. 愛知教育大学研究報告, 40, pp. 219-224.
- 平田賢一・久野綾子 (1999) コンピュータに対する態度における男女差の発達の研究. 愛知教育大学研究報告教育科学, 48, pp. 207-210.
- 平田賢一・久野浩志 (2003) コンピュータに対する高校生・大学生の態度 10年間の比較. 教育メディア研究, 10 (1), pp. 19-25.
- 石井久雄 (2003) 携帯電話で結ばれた青少年の人間関係の特質 「フルタイム・インティメート・コミュニティ」概念をめぐる. 子ども社会研究, 9, pp. 42-59.
- 石川勝博 (2004) ケータイ・コミュニケーションの逆機能に関する研究. 常磐大学人間科学部紀要人間科学, 21 (1), pp. 39-50.
- 石川勝博 (2005) 情報通信技術としてのケータイとコミュニケーション. 日本教育メディア学会 第12回大会論文集, pp. 82-83.
- 海後宗男 (2001) 情報通信技術におけるアンビバレンスに関する研究. 国際基督教大学学報 I-A 教育研究, 43, pp. 157-179.
- 海後宗男 (2004) 大学生の情報通信技術利用の関連要素と社会的デジタル・デバイドの階層化～日本型デジタル階層の構造～. 教育メディア研究, 11 (1), pp. 47-60.
- コポマー, T. (2004) 川浦康至 他 (訳) ケータイは世の中を変える. 北大路書房.
- 栗原正輝 (2003) 若者の対人関係における携帯メールの役割. 情報通信学会誌, 21 (2), pp. 87-94.
- 松田美佐 (2000a) 若者の友人関係と携帯電話利用—関係希薄化論から選択的関係論へ—. 社会情報学研究, 4, pp. 111-122.
- 松田美佐 (2000b) 電話とジェンダー. 廣井脩・船津衛 (編) 情報通信と社会心理. 北樹出版, pp.

71-93.

- 松田美佐 (2002) ケータイ利用から見えるジェンダー.
岡田朋之・松田美佐 (編) ケータイ学入門. 有斐閣, pp. 125-145.
- 三上俊治 (2004). メディア・コミュニケーション学への招待. 学文社.
- 溝渕佐知 (2004). フィンランドと日本のケータイシーン. コボマー, T. 川浦康至他 (訳) ケータイは世の中を変える. 北大路書房, pp. 144-152.
- 仲島一朗・姫野桂一・吉井博明 (1999). 移動電話の普及とその社会的意味. 情報通信学会誌, 16 (3), pp. 79-91.
- 中村 功 (2001a). 携帯電話と変容するネットワーク. 川上善郎 (編) 情報行動の社会心理学. 北大路書房, pp. 76-87.
- 中村 功 (2001b). 携帯メールの人間関係. 東京大学社会情報研究所 (編) 日本人の情報行動2000. 東京大学出版会, pp. 271-303.
- 岡田朋之・松田美佐 (編) (2002). ケータイ学入門. 有斐閣.
- 岡田朋之・松田美佐・羽渕一代 (2000). 移動電話利用におけるメディア特性と対人関係-大学生を対象とした調査事例より-. 平成11年度 情報通信学会年報, pp.43-60.
- 斎藤嘉孝 (2005). 家族コミュニケーションと情報機器-小学生とその親における携帯電話の使用状況-. 情報通信学会誌, 23 (2), pp.61-68.
- スゴグ, B. (2003). 携帯とノルウェーの10代の若者たち: アイデンティティ, ジェンダー, 階級. カッツ, J. E. & オークス, M. (編) 立川敬二 (監修) 富田英典 (監訳) 絶え間なき交信の時代 ケータイ文化の誕生. NTT出版, pp. 334-355.
- 辻大介・三上俊治 (2001). 大学生における携帯メール利用と友人関係~大学生 アンケート調査の結果から~. 平成13年度 (第18回) 情報通信学会大会個人研究発表資料.
- Weil, M. M. & Rosen, L. D. (1995) The psychological impact of technology from a global perspective : A study of technological sophistication and technophobia in university students from twenty-three countries. *Computers in Human Behavior*, 11 (1), pp. 95-133.